

研究課題	幼児期の吃音の生起に関わる音韻的要因		
氏名	松本 幸代	所属	総合教育科学系特別支援科学講座
		職名	特任講師
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ ←受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】 （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）			
吃音の多くは2歳または3歳で発生することが知られている（Yairi & Seery, 2011）。これまでの研究の多くは学齢期以降の吃音を対象としており、幼児期における吃音の発生メカニズムについては明らかになっていない点が多い。 幼児期には多くの子どもが発話の不明瞭さを示すことが知られている。定型発達児の場合、発達に伴って発話の明瞭さは向上し、4歳までに発話の明瞭さが獲得されるといわれている（Coplan & Gleason, 1988）。伊藤（2004）は、1～2歳の定型発達児の自然発話を分析し、1語発話段階、2語発話段階では不明瞭発話が著しく多かったと報告している。不明瞭発話とは、幼児本人は明らかに特定の情報を伝達しようとして発話しているにも関わらず、聞き手には何を言っているのかわからない発話のことをさす（伊藤, 2004）。幼児期の吃音の発生と発話の不明瞭さとの関係については明らかになっていない。 筆者らは、典型的な発達を示す幼児の言語発達に関する縦断研究の過程で、吃音が発生し、その後自然回復した1例を観察する機会を得た。本研究では、吃音が発生する約6か月前の1歳6か月から、吃音が発生した1歳11か月までの不明瞭発話の生起率の変化について検討した。 対象児は日本語を母語とする典型的な発達を示す幼児1例であった。筆者が所属した大学の研究室で行われていた言語発達に関する縦断研究の対象児であった。1歳6か月からの縦断研究の過程で、1歳11か月時に吃音が発生し、3歳2か月時に消失した。 対象児の自然発話データは、1歳6か月時から縦断的に収集されてきたものである。発話データは原則として週に1回、約2時間、対象児宅で自由遊び場面から収集した。本研究では、1歳6か月から1歳11か月までの6か月間、1か月ごとに約100発話を分析した。不明瞭発話の生起率は総発話数に占める不明瞭発話の生起数とした。本研究のデータを含む、対象児の縦断データは、対象児の保護者に研究の目的、方法、個人情報取り扱いなどを口頭及び文書で説明し、同意を得て収集したものである。 本研究の結果、不明瞭発話の生起率が高い傾向がみられたのは1歳7か月時と1歳8か月時で、その後は減少し、対象児の吃音が発生した1歳11か月では不明瞭発話の生起率が最も低い傾向がみられた。この結果から、不明瞭発話の生起率が高い時期には吃音は発生せず、発話の明瞭さが一定程度獲得されてから吃音が発生する可能性が示唆された。 伊藤（2004）は、不明瞭発話の出現および消失過程は韻律単位の獲得と密接に関係すると推測されると述べている。松本・伊藤（2018）は、非吃音幼児1例の1歳11か月時点と2歳3か月時点でのモーラのくり返しの出現を、語の産出におけるモーラ数の正確さの発達との関係で検討し、モーラのくり返しの出現には、モーラという韻律単位の獲得が関わっていることを示唆している。 本研究の結果、不明瞭発話の生起率が最も低くなってから吃音が発生した理由の一つとして、韻律単位の獲得といった音韻の韻律的側面に関する要因が関わっている可能性がある。この点については今後の検討課題としたい。			
【研究成果発表方法】			
日本特殊教育学会 第62回大会において研究発表を行った（「幼児期における吃音の発生と発話の不明瞭さとの関係―吃音の自然回復を示した幼児1例における検討―」）。今後は関連する検討を行い、論文投稿を行う予定である。			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。